

ぞみて、藥にまじへてたてまつられけるとなんかの盃中の蛇とは事たがひたれど、そのやまひのおこれるも愈たるも、かよひてぞおぼゆる。

〔倭訓栞前編三十三〕もの、け 源氏に多くいへり、三代實錄に、物怪と見えたり、楞嚴經に、物怪之

鬼といへり、邪祟をいふなり。

〔源氏物語九〕物のけい。きすだまなどいふものおほく出來て、さまざまの名のりする中に、人にさらに移らず、たゞみづからの御身につとそひたるさまにて、ことにおどろくしうわづらはしきこゆるともなければ、中もの、けとても、わざとふるき御かたきときこゆるもなし。

〔續日本後紀八〕承和六年七月甲申、延僧六十口於紫宸殿常寧殿、令轉讀大般若經、以禁中有物怪也。

〔江家次第七八〕相撲召合 仁壽殿東庭相撲

承平三年、依南殿頻有物怪、御此殿有音樂立合、

〔奇魂一〕病源論 井病名考

歴史に、先靈といひ、物語書に物氣、或は靈、狐憑キツコリ杯云も、皆神氣の類也。物氣、神氣、共に同意

と説れたり、又万葉に、鬼字をも、と云訓に用たるにて、意益明也。

〔榮花物語月宴〕御門中略冷泉、御もの、けいとおどろくしうおはしませば、さるべき殿上人殿ば

ら、たゆまずよるひるさぶらひ給、中はかなく月日もすぎで、ことかぎりあるにや、みかどおり

させ給とての、しる、安和二年八月十三日なり、御門おりさせ給ぬれば、東宮融、圓位につかせ給ぬ。

〔今昔物語十二〕神名睿實持經者語第卅五

然レバ此ノ持經者ノ貴キ思エ世ニ其ノ聞エ高ク成ヌ、而ル間圓融院ノ天皇堀川ノ院ニシテ重